

聖書のレビヤタンのシンボリズムとファンタジー —アビスの怪物から預言者たちの救済者まで—

ダニエル・グレヴィッチ

要旨

レビヤタンとして周知されている聖書の伝説上の怪物は、世界を消滅させようと企む破壊的な力の中核である。しかしながら、ユダヤの民衆的な信仰の中には、同様の海の動物を、悔悛と再生という精神的な理念に関係づけているものもある。本稿においては、古代ユダヤ文学におけるレビヤタン／クジラのイメージと文化的な記述について、また中世キリスト教におけるそれらの影響についても検証する。西欧社会でのレビヤタンのイメージの起源は成長し、何世紀にもわたって、様々な文化において、伝統的な伝承、宗教的エートスにおいて必須のものとなったことを主張する。それぞれの社会は、彼ら自身の集合的原始的恐怖に対応して、独特の様式でこの伝説上の生き物を描写し、苦悩の時代の力と希望の源に練りかえていった。つまり、本稿は、巨大な怪物のイメージが、たとえそれが敗北しようとも（古代異教文明の場合）、統制されようとも（ユダヤ教の場合）、罪人に対する罪の恐怖としての脅しになろうとも（キリスト教の場合）、究極的には力と慰めの源となりうることを主張する。

キーワード

レビヤタン／クジラ、集団的原始的恐怖、ユダヤ伝承、一神教、精神的理念

古代ユダヤの伝承では、神が世界を創造したときに、神は恐ろしい海の怪物と戦ったという。それがレビヤタンである。最後の日に、創造主と動物の間に厳しい戦いが繰り広げられるだろう。そして、最終的に神はレビヤタンを滅ぼすのだ。この行為は、知られているように、世界の終わりとして新しい理想の時代の始まりを象徴する。この考えは創世記で記述される聖書の創造物語と対照をなす。聖書中では、「神は、水に群がるもの、すなわち大きな怪物・・・を創造された」（創 1. 21）とあるからだ。伝説によれば、神が世界を創造したいと思ったとき、最初にしなければならなかったのは、深淵の生き物に対する戦いをしかけることだった。彼らを自分の権威に強制的に従わせ、創造の形式で命令を下すことを認めさせるためである。神は、初めに、暗闇に消えて、光に道を譲るように命じ、そして虚無の深淵に住む生き物と戦いを始めた。最初に、神は、古代の水を支配する巨人であるラハブを打ち破り、それを海の底に送った¹。そして、神は注意をレビヤタンに向ける。レビヤタンは、幾歳月もの日々ほどの多くの目を持ち、太陽のように輝くうろこをもち、強大な顎、火と炎を吐き出す口、煙を吸い込む鼻孔、光の噴流を噴射する目を持っていた²。この巨大な生き物が海を渡るとき、その通った跡は熱と光を発していた。もしくは、海の深みにとどまり、水を煮えたぎらせ、蒸気を発生させていた³。

レビヤタンとして知られるこの伝説の深淵の怪物は、世界を消滅させようと企む破壊的な力に無くてはならない存在である。しかしながら、ユダヤの伝承には、同様の海の生き物、「大魚」と記述される生き物があり、これは混沌とした破壊ではなく、むしろ悔悛と再生という精神的な理念に関係付けられる。最初の、そして疑いなく最もよく知られた例として想起されるのが、罪を犯した預言者ヨナの聖書の話（530BCE 以降作）から発展したものである。ヨナは、集団的想像では通常クジラ（ヘブライ語ではレビヤタン）と考えられるものに飲み込まれ、そして、神によって奇跡的に、厳しい試練を生き残ったのである。聖書の物語によれば、ヨナは魚の暗い腹の中で三日三晩過ごしたという。そして、彼は、ついに自分がこれまで決して本当の意味で見ようと思わなかったもの、神の憐れみの深さを認識したのである。その時ヨナは悔悛し、魚は彼をニネベの岸辺に吐き出したのである（ヨナ 2.1-10）。

ユダヤの伝承はこの伝説のレビヤタンの力強いイメージに甚大な重要性を与えている。聖書で6回言及される⁴生き物であるだけでなく、後代には、タルムード議論、ミドラシュ・アガダー（ユダヤ伝承）、祈祷書、初期、後期の注解書、カバラ、ゾハル、ハシディズムにて、少なくとも828回言及されている。さらに、シナゴグの木製の聖櫃を装飾する木製の彫像の表象にもなっている⁵。

本稿では、レビヤタン／クジラのイメージとその（聖書的な基盤の上に依拠す

る)古代ユダヤ文学での描写、そして後代の中世キリスト教への影響を検証する。最初に、古代、中世、そして現代の研究者による海の生物の科学的な分類を提示し、それが通常クジラとして認識されていることを示す。続いて、ユダヤの集団的記憶における、その重要でありながら、不可解な極性のイメージを考察する。神の領域に挑戦しようとする行動的で破壊的な怪物でありながら、他方で、神によって精神を向上させる道具として使われることに従う従順な生き物である。

筆者が主張したいのは、西欧社会のレビヤタン／クジラのイメージのルーツは何世紀にもわたって成長し、様々な文化において伝統的な教えの無くてはならない部分、また宗教的なエートスとなったということである。それぞれの社会は、彼ら自身の集団的原始的恐怖に対応して、独特の様式でこの伝説上の生き物を描写し、苦悩の時代の力と希望の源に練りかえていった。つまり、巨大な怪物のイメージが、たとえそれが敗北しようとも（古代異教文明の場合）、統制されようとも（ユダヤ教の場合）、罪人に対する罪の恐怖としての脅しになろうとも（キリスト教の場合）、究極的には力と慰めの源となりうることを本稿は主張する。

聖書、神話における海の怪物

聖書では、レビヤタンという語はヘブライ語の原義である「クジラ」の意味では使われてはおらず、むしろ古代の神話上の海の生物に言及していることについては、見解は一致している。しかし、全知全能の神と、何であれ生き物との戦いの概念は、完全に明らかになっているわけではない。1929年古代北シリアのウガリット都市の考古学発掘でラッシュ・シャムラ石版が発見されてからは特に、聖書の怪物とより早期の異教文明の神話のそれとの平行関係が示唆されている。双方の物語での中核となる要素の類似は、興味深い問題を提示している⁶。

紀元前14世紀の半ば、楔形文字で書かれたメソポタミア神話の中心にあるのが、アッカド・バビロニアの嵐と豊穡の神であるバアルと、海と河の神であるヤハムとの間で繰り広げられる王位をめぐる戦いである。この激しい宇宙の戦いにおいて、バアルとその妹アナトは、獰猛な海の怪物を殺す。この怪物とは、一つか二つの存在を表す五つの名前、あるいは別称を持つ生物である。すなわち、ヤハム／ナハル、トゥナン／タニン、蛇、巨大な存在、そして、ヘブライ語のレビヤタンに相当する名前である、七つの頭を持つ蛇ロタンである⁷。またバビロニア叙事詩エヌマ・エリシュにも関係するテキストがある。ここでは、再び海を征服した神の話が力強く中心的に語られる。しかしながら、最初の話が海の征服をめぐる戦いを叙述しているのに対して、第二の話は創造物語に海と陸の支配をめぐる闘争が混合している。バビロニアの詩の中心となるエピソードは、偉大なる王（マ

ルドック）と太古の塩分の濃い海の女性の化身テホーム（ティアマト）との戦いである。ヘブライ語でもテホーム（תהום）が創世記で使われていることに注目したい。これは、（創造以前の）無のことであり、現代ヘブライ語では深淵なる深み（חושך על פני תהום）を意味する⁸。どちらの物語も「水」が一つの総体として集められたことを、そして空を海から切り離すための神の厳しい戦いを描いている⁹。よって、古代メソポタミアの神話においても聖書のテキストにおいても、「水」は単に死者や深い暗黒の領域の象徴だけでなく、より全般的な海の世界と自然の力の象徴となっている¹⁰。それゆえ、ヘブライの神にとっても、メソポタミアの神々にとっても、この戦いは世界に秩序を創造し、荒れ狂う洪水の水をもたらず混沌の力を支配することを意味している。換言するなら、どちらの物語も、上方をさまよう光と神の精神と、下方にある深淵の存在とその生き物たちとの緊張を視覚化したものである。聖書概念では、水と暗黒は、同じ原始太古の、混沌的なものから形成されたと考えられている。創造の第2日目、水は、秩序を維持することを目指した神の光である上方の水と、下方の水に分離される。後者は、原始の混沌に引き戻し、終末の日々をもたらしとする創造以前の力である。そして終末の日々には、水が盛り上がり堤防を破り、陸を水浸しにする¹¹。聖書の中で何度か叙述されている神の力によって制圧されるのはこのような水である¹²。例えば、詩編 104.6-9 を考察しよう。

あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。あなたは境を定め、水がそれを超えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。

物語が続くにつれて、海の地下水の力（バビロニアのティアマト、カナンのゼベル・ヤム、もしくはヘテ人における竜の意味）は、宇宙を水で覆って破壊しようとし、嵐の神であるカナンのバアル神、またはバビロニアのベル・マルドックによって阻止される。水の反乱を克服し、勝利した神が王になる。この戦いが聖書にもほのめかされている。最も似ているのが詩編 93.3-4 である。そこでは、神の戴冠は、「大水のとどろき」の制圧として表象することで立証されている¹³。詩編 104.6-9 では、水が世界を危険に陥れることのないように神の非難によって水が設定された境界の中にとどまる¹⁴。

因果関係上では、初期のバビロニア、カナン神話において周期的な嵐のような戦いのイメージが発生したのは、おそらく地中海沿岸に暮らし、海岸を襲い彼ら

の家を破壊する脅威となる波を恐れる人々によって創造されたからであろう。パピロニアの物語では、マルドゥクと彼の嵐の神々はティアマトを殺し、彼女の体を半分に切り、そのうちの半分で彼は空を作りそれを注意深く封印し、この水が漏れることのないように見張る番人を置いた (En. El. 4, lines 138-140)¹⁵。激しい戦いの間に、ティアマト (彼女自身も海の怪物であるが) は、彼女の代わりに子孫の神々の反乱の間に戦いを遂行してくれる生き物を創造した。それは、鋭い歯のワニ、竜、蛇、野犬、巨大なライオン、魚、カバ、反発的な悪魔たちである。ティアマトの力に若い神々が恐れると、マルドゥクは自分が勝ったら神々の王に就任するという条件で彼女に戦いを挑む。そして、マルドゥクが王になるやいなや、彼は彼自身がこの戦いのために作り出した武器で武装する (En. El. 4, lines 93-104)。この戦いの結果は予想通りのものであるが、ここに参加した生き物の性質に興味を引かれる。これらの戦う海の怪物は、文化を超えた (生きた創造物としての) 海の謎めいた側面を表象している。

同じような伝説上の対立、深淵の怪物と神の間の戦いの残響は、聖書でもイザヤ書、アモス書、ヨブ記に見られる。ヨブは、昼と夜を呪ったが、海の怪物、レビヤタンが深い眠りから覚醒させられて、怒り狂い、偉大なる海の底の暗闇で自らを足枷から解き放ち、蝕か洪水をもたらす。「日をのろう者、レビヤタンを呼び起こせる者がこれをのろうように」(ヨブ 3.8)¹⁶。この戦いの続きは、神と怪物の間で生じる大いなる戦いとしてヨブが叙述している箇所に見られる (ヨブ 41.19-31)。

その口からは、たいまつが燃え出し、火花を散らす。その鼻からは煙が出て、煮え立つかまや、燃える葦のようだ。その息は炭火をおこし、その口から炎が出る。その首には力が宿り、その前には恐れが踊る。その肉のひだはくっつき合い、その身にしっかりとついて、動かない。その心臓は石のように堅く、臼の下石のように堅い。・・・その下腹は鋭い土器のかけら、それは脱穀機のように泥の上に身を伸ばす。それは深みをかまのように沸き立たせ、海を香油をかき混ぜるなべのようにする。

伝説によれば、神はガブリエルに命じてレビヤタンを偉大なる海 (地中海) から追い出したという。ガブリエルは自分のフックでレビヤタンを捕獲するのに成功したが、それを乾いた陸地の上に引き出そうとして、飲み込まれてしまった。そして、神自身がこの怪物を捉えざるをえなくなり、敬虔なる人々の眼前で殺したのである。来る世において (ハ・オラム・ハバ) において、レビヤタン (至高の海の獣) の肉は、他の二つの怪物の肉—ベヘモート (至高の陸上の哺乳類) と

チツ（麒麟のような、至高の空の動物）の肉とともに、メシアの祝宴にて食される。レビヤタンの皮はその祝宴を守るテントとなるだろう¹⁷。海での戦いにのみ焦点を当てるメソポタミアの物語とは違い、ユダヤの物語では、海、地、空を表象する生き物が含まれており¹⁸、神が最終的に宇宙全体を支配することを示唆している。



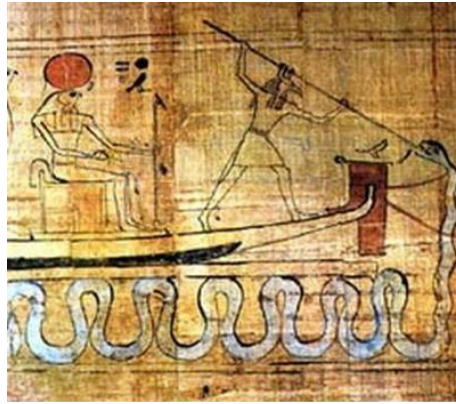
ベヘモートとレビヤタン
ウィリアム・ブレイク（1825）



レビヤタン、ベヘモートとチツ
聖書挿絵、ウルム、ドイツ（1238）

獣の性質

エジプト・メソポタミアの描写であっても、聖書の描写であってもロタン／レビヤタンがどのような種類の生き物を意味していたかを正確に決定するのは難しい。シュパックはメソポタミアの伝承は慎重にぼかされていると評定する。というのも、エジプト人たちは、彼らの神話には何よりも知恵の秘儀と癒しの呪文が含まれており、それを開示することは危険だと考えていたからである。その結果、神話は書き下ろされることなく、口伝で伝えられ、ごく限られた者しかそれらをいかに解説するのか知らなかった¹⁹。確かに、エジプト人は、患者の状況を遠く離れた過去の神話上の出来事に例えた魔術的な呪文で様々な疾病を治癒しようとした。シュパークは、少なくとも三つの呪文に言及している。そこでは、疾病が海に例えられ、エジプト語で神の敵であるヤム（「偉大なる緑の」水）という名前が使われている。その呪文によれば、海／混沌の蛇／ワニがセツ神に敗北したように、疾病が人間の身体から駆逐されるだろう²⁰。



邪悪なヘビのアペップと戦うラーを助けるセツ
エジプト博物館、カイロ

聖書のみドラシュによると、クジラが餌と共に海水を吸い込み、その後、背中にある噴気孔から水を吐き出すのを、古代の船乗りたちは見ていたということが推論される²¹。この現象が、巨大で神話的で、火を吐き出すクジラのような生物という誤ったイメージに繋がった。

この神話に着想を与えたかもしれないもう一つの動物はワニであり、その生物学的特徴は、獣のキラキラ輝くうろこや、水の中から松明のように輝く目の描写において見ることができるだろう。さらに、ワニを表すヘブライ語「タニーン」は、聖書においては海の怪物を指している。例えばイザヤ書 27.1 「**וְהָרַג אֶת הַתַּיִן וְהָרַג אֶת הַתַּיִן**」(海にいる竜を殺される)においては、NRSV (英語の新改訂標準訳聖書)は「竜」と訳している。動物学的に言えば、ワニは海(ヤム/ים)ではなく、むしろ川に住んでいるのだが、確かにエゼキエル書 29.3 では、ナイル川にいる巨大なワニが直接的に言及されている：「**הַתַּיִן הַגָּדוֹל, הַרְבֵּץ בְּתוֹךְ יַאֲרֵי: אֲשֶׁר אָמַר**」(自分の川の中に横たわる大きなワニで、「川は私のもの」と言っている)²²。預言者エゼキエルはファラオ王のことを「ハタニーン・ハガドール」(ナイル川の中に横たわる大きなワニ)と呼んでいるのだが、ここでも、NRSV はそれを文字通りに訳すのではなく、「自分の中の横たわる大きな竜」というより一般的な用語を使っている。

怪物のような爬虫類というのは、確かにワニのことを指しているのかもしれない。それは体長7メートルにも及び、古代において知られていた最も大きく恐ろしい生物の一つであった。恐ろしいワニ、そしてそれらと神との厳しい戦いは、詩編 74.13 にも言及されている：「**שִׁבַּרְתָּ רִאשֵׁי תַיִנִים עַל הַמַּיִם**」(あなたは、海の竜の頭を砕かれました)。この言葉は魚のようなレビヤタンに似ている生物を指し

ているように思われる。というのは、イザヤ書 51.9-10 において見られるように、両者とも大海の深淵の暗黒に住む海の怪物として描かれているからだ。

さめよ。さめよ。力をまとえ。主の御腕よ。さめよ。昔の日。いにしへの代のように。ラハブを切り刻み、竜（ヘブライ語ではタニーン）を刺し殺したのは、あなたではないか。海と大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々を通らせたのは、あなたではないか。

古代において、大きなワニは深刻な脅威ではあったが、エジプト人はそれを神聖なもののみなし、それを傷つけることは禁じられていた。さらに、クジラを実際に見たことのある人はほとんどいなかったと考えられるのに対して、多くの人が実物のワニを見ていたであろう。エジプトの原典においては、このワニはしばしば、浅い水の中から目だけを突き出し、ナイル川に沐浴しに来た人を襲うためのちょうどよいタイミングを待っているものとして描かれている。

レビヤタンの代わりに、あるいはレビヤタンと関連してその名前が時々使われる別の生物は、ヘビである：「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される」（イザヤ書 27.1）²³。これは、同属のウガリット語の記述を暗示する：「あなたがロタン、逃げ惑う蛇を殺した時、曲がりくねる蛇、七つの頭を持つ支配者を滅ぼした時」（KTU 1.3; 1.5）。

バビロニア・タルムード（紀元後 257-320 年）においては、海の怪物は、本来は、魚というよりもヘビの特徴を持ち備えていると考えられていたのではないかと、ラビ・ヨハナンは提案している（ババ・バトラ 74b）。上記の聖書の句を引用しながら、この句の意味するのは、神はオスのレビヤタン（突き刺すヘビ）とメスのレビヤタン（曲がりくねるヘビ）を創造し、彼らが交尾して世界を滅ぼすのを防ぐため、メスのほうを殺したということだとしている。

確かにこの文脈では、ヘビや同様の曲がりくねる爬虫類が言及されているが、最も有力な語源は、「支配する、権力を持つ」を意味するアッカド語の *šalātu* であり、必ずしも我々が知っているようなヘビである必要はないと、アイハ・ラハムニは提案している²⁴。一方、シュパックは別の解釈を提案している。本来のエジプト語の *snk* はワニを意味し、*skn* という語は「飽きることのないこと、食欲と欲望」を意味するという。そこで彼女は、想像上のワニのような怪物の食欲な性質に言及されているのではないかと提案している。あるいは、それは、体長 30 メートルの、神に反抗するヘビであるアポピスの特徴かもしれない²⁵。ユダヤ教のイドラ・ズッタにおいては、このような主張が支持されている。レビヤタンと

は、ある特定の獣ではなく、同等の強さを持つ神々の勢力の間での対立における、第一のライバルを表していると考えられている。

ユダヤ教の伝統における爬虫類としてのレビヤタン

興味深いことに、聖書の NRSV 訳は繰り返し、ヘブライ語の「タニーン」を「竜 (dragon)」と訳しているが、「竜」を意味するヘブライ語の単語 (ドラコン) は別にあり、それはエルサレム・タルムードにおいてもバビロニア・タルムードにおいても使用されている。しかしながら、ヘブライ語の竜は、トカゲ、ヘビ、あるいは陶器の表面に描かれたそのような動物の像を指している。実際、古代ユダヤ文化においては、竜は爬虫類の仲間には属するものと考えられ、他のよくあるトカゲや小さな毒ヘビと同様、何ら特別な存在ではなかった。例えば、バビロニア・タルムード、ギッティーン、56a-b (アボット・デラビ・ナタン、バージョン 1、第 4 章にも同様の記事) において、ラビ・ヨハナン・ベン・ザカイがエルサレムから離れ、ヤブネに中心を築くという話の中に、以下のような会話が含まれている。

(ウェスパシアヌスは) 彼に言った。「はちみつが入った壺があり、その周りには竜 (ドラコン) が巻き付いている。その場合、竜のために壺を壊すのか。」彼 (ラバン・ヨハナン・ベン・ザカイ) は沈黙した。ラビ・ヨセフ (あるいはラビ・アキバだと言う人もいるが) は、彼に関して以下の句を読んだ：「(神は) 知恵のある者を退けて、その知識を愚かにする」(イザヤ書 44.25)。彼はこのように言わなければならなかったのだ。「はさみを取り出し、竜をつかみ、それを殺す。このようにして、壺を傷つけないでおく」と。



トカゲ : Varanus (Psammosaurus) griesus

竜への言及はさらに、ミシュナにおいて見られる。それは、偶像崇拜の象徴として、そしておそらく大地の神々、あるいはあの世の神々の人格化として、明確に理解されている。もしユダヤ人が竜の形が描かれている容器を見つけた場合、その物体を使用することは許されているのか否かという問題を中心に、ここでの議論は展開されている²⁶。

聖書の文脈では、竜という語は、アロンの杖がファラオの目の前で変わったというヘブライ語の「ヘビ」の訳語として、七十人訳とウルガタ訳に最初に出てきている（出エジプト記 7.12）²⁷。竜はまた、ヘレニズムの原典においても見られ、そこでは「draca」はヘビも意味する。例えば、メーディアは、彼女の子らを殺した後、空飛ぶヘビ（drakones/δράκων）によって引かれた巨大な二輪車に乗ってコリントスから逃れた。



メーディアの竜の二輪車、ルカニアの赤像式
紀元前 400 年、クリーブランド美術博物館、オハイオ

キリスト教の伝統における海の怪物

以上のように、海の深淵の様々な力は、ユダヤ・キリスト教の物語においては、自然の様々な力に対する戦いという文脈ではなく、むしろ、悪魔とその使者に対する神とその天使の象徴的な戦いの一部として現れている。12、13 世紀の動物絵画は、怪物のような人を食う獣を、巨大なクジラのような姿で明確に描いている²⁸。キリスト教においては、海の怪物は、罪人を飲み込むものとして描かれているだけでなく、そのクジラの腹はしばしば地獄を表し、クジラの顎は地獄の門に対応している。



罪びとを飲み込む水の怪物、その脇に立ち、そのあごを閉じる天使
アンリ・ド・ブロワによる詩編の挿絵、
1161²⁹



偽りの預言者を飲み込む悪魔を見る聖ジャン
フランス、1220-70年。ミニアチュール、トゥルーズの黙示聖書

恐ろしい海の獣というモチーフは、中世の修道士たちの想像力に火をつけた。彼らは、それを、人々の骨を粉碎し、彼らの体を毒し、そしてその体をかみ砕き、吐き出し、再びかみ砕くといった、様々な種類の動物に関する多数の像に発展させた。これらの動物には、虫、巨大な毒ガエル、曲がりくねるへび、そしてワニが含まれていた。これらの像の中には、その生物の目が、悪魔のような光で輝いていたり、地面から現れ、何ら明確な理由なしに無実の人々に火を放つ、という風に描かれているものもある³⁰。サリズベリーによれば、「この像は、中世の視覚作品を通じて続いていき、ダンテの『地獄篇』に至る。そこでは、地獄の底にいるルシファーが、自分の主人を裏切った者たちの魂を永遠に食らう」³¹。これは、殉教のパラドックスと理解できるかもしれない。獣により食られるという恐怖を克服していることを示すために、聖者は、救済のために不可欠な要素として、死の際に、自分の肉体が獣の歯によって噛み砕かれ、食い尽くされることを切望しているということを表現しているのだ：「イグナティウスは殉教を通して・・・キリストの食物となり、それゆえキリストの肉体の一部となる（というのは、食物はそれを消費する者の肉体に取り込まれるので）。そして、キリストの肉体の一部となることによって、聖者は死、腐敗、そして彼の肉体をかみ砕く獣のエサとなる（そしてそれ自体に変わる）といったことを克服することができるのだ」³²。これらの物語は、「食われるという深く根付いた恐れ、それは結局人間の死への恐

れであるのだが、その恐れを強めている」とサリズベリーは結んでいる³³。

ヨナとクジラ

中世キリスト教の絵画的表現法に見られる、罪人を飲み込む強大な獣という像は、聖書の海の獣であるレビヤタンとしばしば結び付けられている。しかし、この像の具体化には、全く別の源となるものが貢献しているとも考えることもできる。それは、ヨナを飲み込んだ「大きな魚」であり、これは通常クジラと考えられている。紀元前 530 年以降に書かれたアミタイの子ヨナの物語は、神により預言者ヨナに与えられた使命について語っている。すなわち、彼はアッシリアの首都であるニネベに行き、その住民に悔い改めを促さなければならない。しかしヨナは、心を開いて自分の運命を受け入れることができず、逃れようと試みる。それに対して神は、嵐を呼び起こし、海の最も恐ろしい生物に命じて、この罪人を飲み込ませる。三日後、この生物は無事ヨナを海辺に吐き出し、彼に信仰と従順を取り戻させる。



ピーター・ラストマン（1621年）、ヨナとクジラ
クンストパラスト美術館、デュッセルドルフ

Prophetic Adventure: Jonah as the Liar of Truth（『預言者の冒険：真実を偽った者としてのヨナ』）において、ルツ・ライヘルベルグの基本的な見解によれば、一般的な集団的記憶においては、この「大きな魚」とはクジラのことであるという。通りにいる誰かに「ヨナとは何者か」と尋ねてみれば、「クジラに飲み込まれた者

だ」という答えが返ってくるはずだ、と彼女は言っている。別の言葉でいえば、“*Quid dit Jonah dit baleine*”（ヨナについて語ることは、クジラについて語ること）だと彼女は主張し、ヨナこそが赤ずきんやピノキオの原型であると付け加えている³⁴。

三つの一神教すべてにおいて、ヨナは第一に、復活の預言者として、すなわち、内なる旅を通して、死んだ状態から上昇し、救済される象徴とみなされている。後の中世のキリスト教思想においては、彼は殉教者の苦難、死、そして復活を表している。イスラームにおいては（クルアーンでは彼はユースス *يونس* である）、彼は自殺した預言者の象徴である。ユダヤ教の伝統においては、彼の物語は精神的な目的と贖いを得ることの寓話である。『神の国』（18.30）において、聖アウグスティヌスは、ヨナの経験それ自体が、キリストの復活をこの預言者が見通したものではないかと考えている。「預言者ヨナは、言葉によってというよりも、彼自身の苦しい経験によって、口でそれを言った場合よりもずっと明確な仕方で、キリストの死と復活を預言したのだ。というのは、なぜ彼はクジラの腹の中に取り込まれ、三日目に元に戻ったのか。それは他にもない、キリストが三日目に地獄の底から戻ってくるということに関して、彼はそのしるしであるからだ」³⁵。ユダヤ教の伝統では、*Maftir Yona* として知られるヨナ書は、ユダヤの暦における最も神聖な日ヨム・キプールにおける典礼の終わりに読まれている。それが意図するものは、贖い（*geula*）の信仰を強めること、そして、詩編 139.7「私はあなたの御魂から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう」にもあるように、人は己の悪行において神から逃れることはできないと教えることである。ちょうどニネベの人々が、彼らの道を改めた後に救済を得たように、人は悔い改める義務があるのだ³⁶。

海の怪物に対峙する英雄というテーマは、事実上普遍的なものであり、ほぼすべての古代文化において見られるものであるが、この聖書の物語は、その独自の特徴のため、すべての一神教にとって特別の意味を持っているように思われる。通常の英雄と海の獣の物語と違って、ヨナの物語における魚は、彼の競争相手でも敵でもない。さらに、ヨナが預言的な経験をする時、彼はもはや若者であるようには見えない。つまり、戦士としての自分の身体的な力や技術を証明しなければならないような人生の段階には、彼はいないのだ。それどころか、彼は預言者としての義務から何とかして免れようとして、対立の場面から可能な限り遠くに逃げることを試み、ついには、彼を船外へ放り投げるといふ船乗りたちの意図にも全く無頓着になり、「こうして、彼らはヨナをかかえて海に投げ込んだ」（ヨナ 1.15）。彼は死を望んでいたとさえ言えるかもしれない。聖書によれば、「ヨナは彼らに言った。『私を捕えて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう』（ヨナ 1.12）。そして、その後、彼は神にはつき

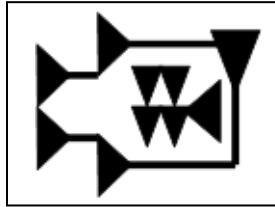
りと以下のように懇願している：「主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きてより死んだほうがましですから」（ヨナ 4.3）。さらに、中世キリスト教の寓話における否定的な含蓄と対照的に、「大きな魚」によって飲み込まれることは、ヨナの生存にかかわる試練においては肯定的な役割を演じている。ヨナ 2.1-2 において、「魚」に対して dag というヘブライ語だけでなく、その女性形である daga も使われていることを根拠にして、ニネベの人々への彼の使命の完了、（魚の腹の中にいるという）彼の身体的な状況、そしてクジラ／大きな魚が女性であるということ³⁷、これらの間に直接的な相互関係が存在すると、ライヘルバーグはみている。

וַיְהִי יוֹנָה בְּמַעַי הַדָּג, שְׁלֹשָׁה יָמִים וּשְׁלֹשָׁה לַיְלוֹת; וַיִּתְפַּלֵּל יוֹנָה, אֶל-ה' אֱלֹהָיו, מִמַּעַי,
הַדָּגָה.

[そしてヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。それからヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈った。]

ライヘルバーグはまた、ヨナという名前（ヘブライ語で יוֹנָה、yud-vav-nun-hee という綴り）と、ニネベという町の名前（ヘブライ語で נִינְוָה、nun-yud-nun-vav-hee という綴り）との間にある、偶然とは言えない類似点を指摘している³⁸。この類似点は、預言者の一連の精神的な上昇を結び付ける不可欠なものであり、彼の境遇は、彼の精神状況の象徴である。船乗りたちは、ヨナが大嵐の真ただ中でも眠ることができるのに驚いて、彼に尋ねる。「いったいどうしたのか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい」（ヨナ 1.6）。それ以前に、彼は神によって以下のように命じられている。「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ」（ヨナ 1.2）。この平行箇所が示しているのは、ヨナは、身体的というよりも、むしろ精神の無感覚の状態から起き上がることを命じられているのだ³⁹。それゆえに、ヨナは、彼の神に対する義務を無視することから始まり、子宮のような環境で通過儀礼を経験し、そしてついに、復活の過程を経験している、と主張することもできるかもしれない。クジラの腹の中で三日三晩過ごし、とうとう目が開かれると、彼は自分を救うように神に祈る。神は彼の叫びを聴きいれ、出産と似たような行いで、無事彼を岸に吐き出す。他のあらゆる知られている人間対海の獣の物語と違って、ここでは、魚には、ヨナを食べつくす意図はない。むしろ魚は、この預言者の教育のための道具として使えるようにという神の要請に謙虚に従っているのだ。なぜならば、「主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた」（ヨナ 1.17）からだ。

本来の楔形文字におけるニネベの記号は、この都市の経済が漁業に基づいていたことから、「家の中にいる魚」とであると、ベンジャミン・ゲツンハイトは指摘している。ヘブライ語でも、ニネベという名前は魚の家（ニン（נִינְבֵּי）一魚、ナヴェ（נָוֶה）一家）を意味すると、彼は付け加えている⁴⁰。



楔形文字におけるニネベ市の印

このことは、世界の他の諸国でさえも、もし彼らの悪行を悔い改めるなら、神の慈悲を受けることができるという神のお告げであると、ゲツンハイトは解釈している。

しかしながらヨナは、このお告げを受け入れようとせず、自分の義務から何とかして逃れようとする。皮肉なことに、彼は、「魚の家」という意味の町から逃れようと試みるが、結果として、神の命令によって魚に飲み込まれてしまう。その魚は、彼が「眠りから目覚め」、例の町に対する彼の義務を進行することができるまで、彼を守るのだ。そして、例の町の名前は、彼自身の名前に似ている⁴¹。

二つの生き物、一つのメッセージ

以上みたように、しばしば一つの構成物として扱われているが、この伝説上の海の怪物には、実際には二つの異なるバージョンが存在する。第一のバージョンは、怪物レビヤタン、すなわち、地を水で氾濫させると言って脅す、カナンにおける混沌の象徴である。これは、秩序を表す神の敵という形で、ユダヤ教のみならずキリスト教の伝統によっても採用された。この恐ろしい海の獣は、ユダヤ教の集会的な記憶においては、人間によるものであれ神によるものであれ、進歩、成長、繁栄といったものを目指すあらゆる努力を、容赦なく阻もうするものであり、後のキリスト教の解釈においては、それは、罪びとたちの究極的な罰を反映している。第二の、ヨナの物語において伝えられているようなバージョンは、全く異なる生物である。それは、通過儀礼の一つの過程として英雄を自分自身から守るために、神によって送られてきた、守ってくれる、従順な海の住民である。しかし、対極にあるものとして提示されているが、これら二つの生物は多くの点

で同一の存在である。両者とも伝統的にクジラ（ヘブライ語ではレビヤタン）とみなされてきたし、両者とも、人とその運命との間での究極の闘争の縮図として、そしてさらに重要なことは、創造主の支配力を確立するものとして使われている。

厳しく容赦のない海と対峙しようとする英雄の意思、あるいは別の言葉でいえば、混沌の力の持つ抑えられない魅力は、様々な文化や時代を通して繰り返し語られている。人間の英雄や半神半人に関しては、セネカが、“*Avida est periculi virtus*”（勇敢は危険を熱望している）という必要性として、このテーマを最もうまく述べている⁴²。この物語の宗教的な含意に関しては、創造主の支配力は、はたして闘争の物語を通してのみ最もうまく示されているのかどうか、疑問を呈することもできるだろう。もしかしたら、単に善と悪ではなく、一方で精神的、身体的勇氣、他方で極度の恐れ、といった正反対の要素の間に存在する不変のつながりを例示している物語を通してのほうが、そのメッセージはよりよく伝えられるのではないだろうか。

注

- ¹ 「あなたご自身が、ラハブを殺された者のように打ち砕き、あなたの敵を力ある御腕によって散らされました」（詩編 89.10）。特に断りのない限り、聖書からの引用（英語）は全て新改訂標準訳聖書（NRSV）からである。
- ² 「私は大きな光を海に見た。彼は彼に言った。もしかしたら、あなたはレビヤタンの目を見たのだ」（バビロニア・タルムード、ババ・バトラ 74b）。
- ³ 「その鼻からは煙が出て、煮え立つかまや、燃える葦のようだ。その息は炭火をおこし、その口から炎が出る」（ヨブ 40.20-21）。
- ⁴ イザヤ 27.1（2回）、詩編 74.14、詩編 104.26、ヨブ 3.8、ヨブ 40.23-24。
- ⁵ 完全なデータベースは、The Responsa Project: Global Jewish Database, Bar Ilan University. <http://responsa.biu.ac.il> を参照。
- ⁶ 聖書のテキストとウガリット語のテキストの比較に関しては、特に以下を参照。H. Gunkel, *Schöpfung und Chaos in Urzeit und Endzeit*, Göttingen (1894); W.G. Lambert, “A New Look at the Babylonian Background of Genesis,” in *Babylonian and Israel* (Edited by H.P. Müller; Darmstadt, 1991), 94-113; S.E. Loewenstamm, *Comparative Studies in Biblical and Ancient Oriental Literature* (AOAT 204) (Neukirchen-Vluyn, 1980), 346-361, 465-470; J. Day, *God's Conflict with the Dragon and the Sea: Echoes of Canaanite Myth in the Old Testament* (Cambridge UK: Cambridge University Press, 1985); また、以下のエジプトの資料による神と海との戦いと比較せよ。Nili Shupak, “He Subdued the Water Monster/Crocodile,” in *Iyunei mikra ve-parshanut*, (Vol. 10; Edited by M. Garciel et al.; Ramat Gan: Bar Ilan University Press, 2011), 325-342 [in Hebrew].
- ⁷ 「なぜならあなたは、ロタン、邪悪なヘビ、すなわち七つの頭を持つ力強いものを殺

した」(KTU2 1.3 II: 5-8)。Mark S. Smith, “The Ugaritic Baal Cycle: Volume 1” of KTU 1.1-1.2. in *Vetus Testamentum Supplements series* (Vol. 55; Leiden: Brill, 1994); “The Ugaritic Baal Cycle: Volume 2,” in *Vetus Testamentum Supplement series* (Vol. 114.; Leiden: Brill, 2008); http://web.archive.org/web/20080115123739/http://www.geocities.com/SoHo/Lofts/2938/myt_hobaal.htm; Sema'an I. Salem and Lynda A. Salem, *The Near East: The Cradle of Western Civilization* (Bloomington, IN: Writers Club Press, 2000).

- ⁸ アッカド語文学では、怪物の女神の名は、カナン語と同様に、Ti`amat と綴られるが、Ti`aw(w)at と発音される。これは、おそらく、古代ヘブライ人には、平行するヘブライ語の *tehom* のようには聞こえなかったと思われる。一方で、アッカド語とシュメール語の神話は海の支配を、淡水の神である *Absu* に帰しており、これはおそらく英語の *abyss* の語源である。よって、文化間での言語上の修正を加えた移動というのは、提案することは可能である。

この論文は、主に以下の翻訳に基づいている。Edited by W.G. Lambert and S.B. Parker, *Enuma Elis: The Babylonian Epic of Creation: The Cuneiform Text* (Oxford, UK: Clarendon Press, 1966); see also: Benjamin R. Foster, *Before the Muses: An Anthology of Akkadian Literature* (Bethesda, MD: University Press of Maryland, 1993), 351-402; Benjamin R. Foster, “Epic of Creation,” in *The Context of Scripture, Volume 1: Canonical Compositions from the Biblical World* (Edited by William W. Hallo and K. Lawson Younger, Jr.; Leiden: Brill, 1997), 390-402.

- ⁹ 「ついで神は『大空よ。水の間にあれ。水と水との間に区別があるように。』と仰せられた」(創世記 1.6)。mêšunu ištēniš inhhīqūma [mingled their water together] (En. El. I, line 5)。特に断りのない限り、ここではエヌマ・エリシュは、ランバートとパスカーの混成楔形文字版から標準化した形で引用されている。これらの行に関する議論は、以下を参照。Piotr Michalowski, “Presence at the Creation,” in *Lingering over Words: Studies in Ancient Near Eastern Literature in Honor of William L. Moran* (Edited by T. Abusch, J. Huehnergard et al.; Atlanta, GA: Scholars Press, 1990), 383-384; and online, in *academia.edu*, at: http://umich.academia.edu/PiotrMichalowski/Papers/466309/Presence_at_the_Creation

- ¹⁰ 一方、エリアードによれば、多くの伝統において共通してみられる、水をなだめるというテーマは、創造の時の永遠の回帰、すなわち、混沌の宇宙的征服と秩序の確立を普遍的に象徴するという。M. Eliade, *Cosmos and History: The Myth of the Eternal Return* (translated by W. Trask; Princeton, NJ: Princeton Univ. Press, 1974), chapter 2.

- ¹¹ Louis Ginzberg, *The Legends of the Jews* (Vol. 5; Baltimore, MD: Johns Hopkins University, 1998 [1925]), 16-17.

- ¹² 詩編 29.3、33.7、65.5、77.17-21、135.6、89.9-10、ヨブ 26.12 も参照。

- ¹³ 「主よ、川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます」(詩編 93.3-4)。

- ¹⁴ 強力な自然の力の間での争いへの言及は、他にも、創世記 1.2、1.6-10、1.20-21、そしてよりはっきりとイザヤ 51.9-10、詩編 29.10 にもみられる。

- ¹⁵ 一方、ヨブ 38.8-10 では、「海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを

- 閉じ込めたか。・・・わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けた」。
- ¹⁶ 詩編 74.14、そしてヨブ記へのアモス・ハハムの注解 (Jerusalem: Rabbi Kook Institute) も参照。
- ¹⁷ Ginzberg, *The Legends of the Jews* ; バビロニア・タルムード、ババ・バトラ 74b, 75a も参照。
- ¹⁸ 第二正典のバルーフ書とエズラ記における夢の光景も参照。"ובהמות יגלה ממקומו ולויתן יעלה מן הים הם שני התנינים הגדולים אשר בראתי ביום החמישי לבריאה ואשמרם עד הזמן ההוא ואז יחיו למאכל לכל-אשר ישארו." Apocalypse of Baruch A (propheta Baruchi) 29:4; また、以下も参照。Apocalypses of Ezra (propheta Ezra) 4:49-52.
- ¹⁹ Shupak, "He Subdued the Water Monster/Crocodile," 327, note 6.
- ²⁰ Shupak, 330-331; see also: A Massart, *The Leiden Magical Papyrus* (I 343+ I 345, suppl. OMRO, 1954), 16-17, 64-67.
- ²¹ Menachem Dor, *Fauna in the Era of the Scriptures: the Mishnah, and the Talmud* (Tel Aviv: Graph Or-Daphtal, 1977), 74-76 を参照。
- ²² この生物は複数の預言者によって言及されているが、タニーム (תנים) とタニーン (תנין) という聖書ヘブライ語が指示する内容は、時として紛らわしいということは指摘しなければならない。例えば、"כִּי דָבַרְתִּינִי, בְּמִקוֹם תְּנִיִּים; וַתִּכַּס עָלֵינוּ בְּצַלְמוֹת" (しかも、あなたはジャッカルに住む所で私たちを砕き、死の陰で私たちをおおわれたのです) (詩編 44.19) においては、ヘブライ語からでは、海の生物と野生のジャッカル、どちらが意味されているのか明らかでない。一方、聖書の他の箇所では、言及されている獣をその文脈から正確に理解することができる。例えば、イザヤ 43.20 : "תִּכְבְּדֵנִי חַיַּת הַשָּׂדֶה תְּנִיִּים וְבָנוֹת" (野の獣、ジャッカルや、だちょうも、わたしをあがめる) や、エレミヤ 49.33 : "וְהָיְתָה הַחֹרֶרֶת לְמַעַן תְּנִיִּים שְׂמָמָה" (ハツオルはとこしえまでも荒れ果てて、ジャッカルに住みかとなる)。両者とも、人の住んでいない砂漠地帯に暮らす、動物学上の野生の獣を指している。一方、別の箇所では、同じ語がナイル川のワニを指すために使われている。例えば、ここに言及されたエゼキエル 29.3 や、同じエゼキエル 32.2 : "וְאֵתָהּ, פִּתְנִיִּים" (あなたは海の中のわにのようだ。川の中であれば回った)。「タニーム・バヤミーム」は、水の中にいるワニのことである。
- ²³ ここでも、「竜」はヘブライ語のタニーンからの訳である。
- ²⁴ Aicha Rahmouni, *Divine Epithets in the Ugaritic Alphabetic Texts* (translated by J. N. Ford; Leiden: Brill: 2007), 302-333.
- ²⁵ Nili Shupak, *Where Can Wisdom Be Found? The Sage's Language in the Bible and in Ancient Egyptian Literature* (Freiburg Schweiz: University Press, 1993), 108-110, 114-116。アポピスについては、例えば以下を参照。L.D. Morenz, "Apopis: On the Origin, Name, and Nature of an Ancient Egyptian Anti-God" (JNES 63, 2004), 201-205; J.F. Borghouts, "The Evil Eye of Apopis," in *Journal of Egyptian Archeology* 59 (1973), 114-150.
- ²⁶ Mishnah Avoda Zara 3.3, Jerusalem Talmud Avoda Zara 3.3, 43c, Babylonia Talmud Avoda Zara 43a を参照。「ある人の見解によれば、その容器を用いることは不適切なので、壊さなければならない。別の人の見解によれば、それぞれの容器はその価値に基づいて

評価されなければならない。その上に描かれている絵は調べる必要がある。許されるものもあれば、禁じられるものもある」。

- ²⁷ 参照 : E.M.M. Eynikel and K. Hauspie, “The Use of ‘Dragon’ in the Septuagint,” in *Biblical Greek Language and Lexicography. Essays in Honor of Frederick W. Danker* (Edited by B. Taylor et al.; Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Pub. Co., 2004). ウルガタのラテン語訳も参照 : “proieceruntque singuli virgas suas quae versae sunt in **dracones** sed devoravit virga Aaron virgas eorum.”
- ²⁸ *Physiologus*, (Translated by Michael J. Curley Austin; TX: University of Texas Press, 1979), 83 と比較せよ。
- ²⁹ In Stéphane Audeguy, *Les Monstres: Si loin si proches* (Paris: Gallimard, 2007), 25.
- ³⁰ Joyce E. Salisbury, *The Beast Within: Animals in the Middle Ages* (NY: Routledge, 1994), 73; Eileen Gardiner, *Visions of Heaven and Hell Before Dante* (NY: Italica Press, 1989), 38-41, 70.
- ³¹ Salisbury, *The Beast Within*, 73.
- ³² Salisbury, 72.
- ³³ Ibid.
- ³⁴ Ruth Reichelberg, *L'aventure prophétique: Jonah, menteur de Vérité* (Paris: Albin Michel, 1995), 23.
- ³⁵ Saint Augustine, *The City of God* (Translated by Marcus Dods; NY: Modern Library, [1950] 2000), 635.
- ³⁶ *Vitry Machzor*, (Berlin: S. Hurwitz edition, 1896-1897), 293-294 [in Hebrew].
- ³⁷ Reichelberg, *L'aventure prophétique*, 116.
- ³⁸ Reichelberg, 91.
- ³⁹ 創世記 21.17-21、列王記上 19.21 と比較せよ。
- ⁴⁰ Benjamin Gezuntheit, “Iyunim be-sefer Yona” [Studies of the Book of Jonah], in <http://www.tefilah.org/wpcontent/uploads/2011/03/SeferYonah.doc> [in Hebrew]. 楔形文字碑文に描かれたニネベの町の名については、R. Borger, *Assyrisch-babylonische Zeichenliste*, Neukirchener Verlag, 1978, Seite 95, Nr. 200; Seite 203, Nr. 589. ゲツンハイトによれば、魚の腹の中にある三角形は、「脱出」、「運命」、あるいは「植物」を指しているという。
- ⁴¹ 参照 : Gezuntheit, *Iyunim*; R. Borger, *Assyrisch-babylonische Zeichenliste* (Neukirchener Verlag, 1978), Seite 95, Nr. 200; Seite 203, Nr. 589.
- ⁴² Seneca, *De Providentia*, 4, 4.

編集者注 : 本論文における聖書からの引用は全て *New Revised Standard Version* (新改訂標準訳聖書) を新たに和訳したものであり、新共同訳聖書とは訳文も節の区切りも異なっている。